

アンケート調査に基づく建設業に対する大学生の意識調査と分析

日本大学工学部 矢吹裕紀, 土屋 順, 正 中村 晋

1.はじめに

近年、建設業の労働者や若手入職者の減少が問題となっている。災害の多い日本において災害対応を含む維持管理を行う建設業者の減少により、技術力の低下や国民の安全、安心に影響が生じるおそれがある。また若手入職者の減少により技術力の維持や伝承についての課題がある。建設業のイメージと人手不足の改善に向けて、自治体や企業が建設業に関するアンケート調査を実施し、資料の作成やインターシップ、見学会などの取り組みが実施されている。しかし、これら取り組みが必ずしも成功しているとはいいがたく、検証が必要であると考えられる。

ここでは、福島県が県内の大学生、高専生、工業高校の高校生に実施したアンケート調査のうち、日本大学工学部の学生を対象とした結果に基づき、建設業への就職に関する動機や建設業のイメージを人間性心理学の考え方に基づいて分析を行った結果を報告する。

2.調査方法

アンケートの内容は、就職するための要望や不安要素の質問が 3 問、要望の具体例の記述を 2 問、建設業への関心を問う質問が 3 問、建設業のイメージを問う質問が 1 問の合計 9 問の構成であり、いずれも 15 から 20 の選択項目から 3 項目を選択する様式となっている。対象者は日本大学工学部の土木工学科 2,3 年生、建築学科 3 年生であり、270 人からの回答を得た。

3.分析方法

ここでは就職を考える上での重要要素と建設業に関するイメージに関する質問に着目し、マズローの欲求 5 段階理論とハーズバーグの二要因理論の 2 つの人間心理学の理論に基づき、重要要素とその背景について分析を行う。その際、建設系の学科ではあるものの、土木工学科と建築学科の 3 年生の回答を以下に示す 2 つの人間心理学の理論に基づいて比較することにより、就職に対する動機としてのやりがいとその背景の明確化を試みる。

a)マズローの欲求 5 段階理論は「人間は自己実現に向かって絶えず成長する生きものである」と仮定した人間性心理学であり、図-1 に示す 5 段階のピラミッドの形になぞらえ、低次の欲求が満たされるに従い、どんどんそれ以上の欲求が生まれるとする理論である。この理論から学生は企業にたいして、就業環境に関連する安全要求からやりがいに関連する自己実現要求との関連について分析を行う。

b)ハーズバーグの二要因理論は、人が仕事に対して「満足」を感じる要因と「不満足」を感じる要因は、全く別のものであるという理論であり、満足を感じる要因を「動機づけ要因」、不満足を感じる要因を「衛生要因」とする。表-1 にアンケートの質問と関連する「動機付け要因」と「衛生要因」の一例を示す。「動機付け要因」は a)の「自己実現欲求」「承認欲求」及び「社会的欲求」の一部と関連している。この理論では「衛生要因」の欲求を満たしても、満足を感じることはなく、「動機付け要因」の欲求を満たすことが満足を感じることに繋がるということであり、企業が社員のモチベーションをアップさせて仕事の効率化を図ることや、離職率の低下のための方策を考える上で参考となっている。就業に係わる不

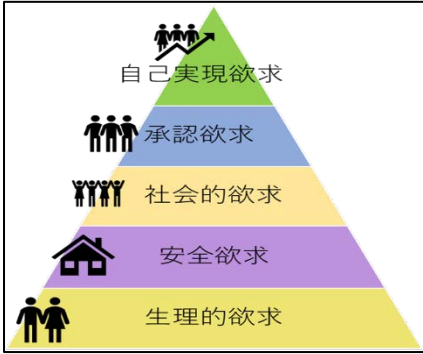


図-1 マズローの欲求5段階説

表-1 ハーズバーグの二要因理論

「満足を招く原因」	「不満足を招く原因」
達成	会社の方針と管理
承認	監督
仕事そのもの	管理者との関係
責任	労働条件
昇進	給与
成長	同僚との関係
	個人生活

キーワード: アンケート, 建設業, 意識調査, 大学生

連絡先 〒963-8642 福島県郡山市田村町徳定字中川原 1 TEL 024-956-8712

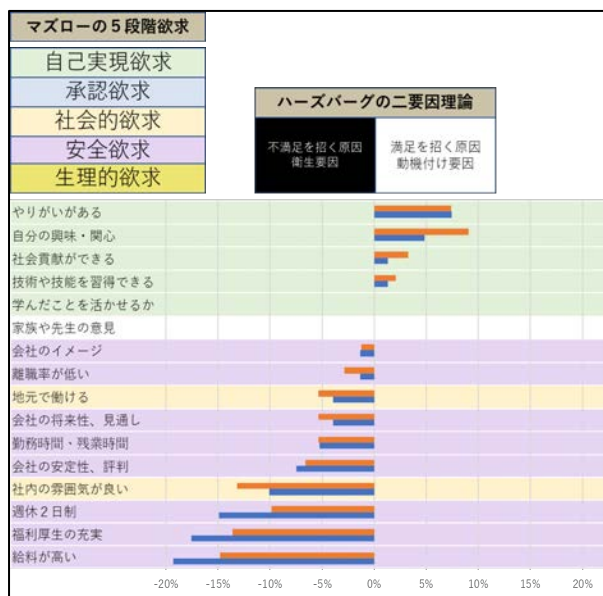


図-2 就職に関する重要要素

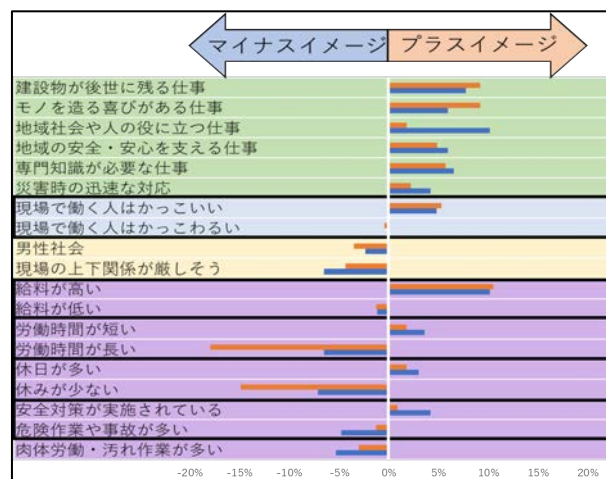


図-3 建設業のイメージ

満足の要因、満足に至る要因を分析し、学生の就職に対してのモチベーションアップの方策について分析を試みる。

4.分析結果

まず、就職に関する重要要素に関する質問は図-2 に示したように 16 項目の選択項目から 3 つまでの選択回答であり、各項目を a)の理論を踏まえて各要求と関連づけ、項目を選択した割合を学科別に示している。さらに、b)の理論の動機付け要因をプラス側、衛生要因をマイナス側に示した。どちらの学科も上位 2 つは「安全欲求」で「衛生要因」に関連する「給料が高い」と「福利厚生が充実」であり、低次の欲求、また不満足に関する要因に関する関心が高いことがわかる。3 番目に多かった回答は、土木工学科では「安全欲求」を指すものであるが、建築学科においては「社会的欲求」に関する回答であった。さらに建築学科の「社会的欲求」「自己実現欲求」が 18%、21%と土木工学科の 14%、14% に比べ上位の欲求が強いことがわかる。土木工学科は就職を考える上で「不満をなくしたい」という欲求が強いのに対して、建築学科は「満足を得たい」という欲求が強いと考えられる。

次に、建設業のイメージに関する質問は 20 項目から 3 つまでの選択回答であり、各項目を a)の理論を踏まえて各要求と関連づけ、安全欲求に関する項目をプラスとマイナスの要因に分けたものを学科別にまとめて図-3 に示した。土木工学科は安全要求に関するプラスイメージ「給料が高い」と自己実現要求の「地域社会や人の役に立つ仕事」の割合が多く、建築学科は安全要求に関するマイナスイメージ「労働時間が長い」の割合が多い。

さらに、両学科は「週休 2 日制」を重要要素と考えているが建設業のイメージは「休みが少ない」と答えており、「安全欲求」を満たすことができないというイメージをもっていることも分かる。

5.考察

心理学的な手法による分析により、土木工学科と建築学科で就職に関する重要要素やイメージに差異があることが分かった。その理由は、アンケート後に実施したヒヤリングなどから、土木工学科は公開されている情報から自分自身が就職後に実施する仕事を現実的にイメージできないが、建築学科は具体的にイメージできているため、自己実現つまり「やりがい」に関する「動機付け要因」も高くなるためであることが分かった。つまり、両学科ともに自分が実施する仕事について現実的で具体的な情報を得ることで、高次の欲求を高くすることができると考えられる。

6.まとめ

建設系の大学生を対象としたアンケート結果の分析より、建設業に関する知識不足、特に会社に入ってから具体的なイメージが不足していることから、アルバイト等で企業での現実的な仕事の経験をする、働き方改革を促進し、「デジタル情報プラットフォームを活用した情報発信」やそれら「経験の場」を考える必要がある。

参考文献: 上野智, Civil Engineering Consultant, Vol.285, pp.8-11, 2019